仏頂尊勝陀羅尼の研究
—漢訳諸本の成立をめぐって—

佐々木大樹＜大正大学博士課程＞

一、はじめに
二、仏陀波利・杜行顗・地婆訶羅・義浄訳『仏頂尊勝陀羅尼経』について
三、金剛智・善無畏・不空訳の尊勝陀羅尼系儀軌について
四、結　語

一、はじめに

筆者はこれまで阿地瞿多訳『陀羅尼集経』全十二巻を中心に初期密教について研究を進めてきた。最近では初期密教の中でも、中心的な位置を占めた仏頂尊の研究に傾倒しており、先の学会では仏伝『舎衛城の神変』を題材として、釈迦仏頂の成立背景等を考究した。

仏頂尊の先行研究は、概して多くはないが、三崎良周・長部和雄・千葉照観先生等が各々論文を執筆している。この中でも、三崎良周先生の「仏頂系の密教—唐代密教史の一視点—」が最も多角的・網羅的に述べ、また様々な問題提起を行なっており、筆者も啓発される点が多い。しかし異系統・異時代の仏頂系テキストを一所に用いたために、文脈によっては、仏頂尊のイメージが広漠となってしまった感も否めない。

釈迦仏の智慧の象徴としての仏頂肉髻、それに対する信仰がやがて「仏頂尊」イメージを生み出し、それから幾種かの定型の尊格が創出され、付随して各々の陀羅尼・受持法が生成・展開されたようである。代表的な仏頂尊としては、一字仏頂・白傘蓋仏頂・(尊)勝仏頂等の名が挙げられるが、これらは独立した経典・

陀羅尼を有しており、各々固有の展開・信仰形態が存したものと想像される[1]。

これらの仏頂系の諸潮流は、菩提流志訳『一字仏頂輪王経』・『五仏頂三昧陀羅尼経』・不空訳『菩提場所説一字頂輪王経』という一連の経典群において、五仏頂説として整理されてくる。さらに中期密教経典では、一字仏頂(金輪)が大日如来と結び付き、仏頂系の潮流は、中期密教の体系に組み込まれることになる。またこの段階において、仏頂尊に異なるイメージの付加、例えば星宿・道教との融合が少なからず行なわれ、本来のイメージを乖離することもしばしばであった。

以上は筆者が想定する仏頂尊の大まかな展開史であり、言葉足らずな部分、また訂正されるべき部分も多いと思われるが、強調したいことは仏頂尊の展開にはいくつかのレヴェルが介在することである。仏頂尊が登場する経軌の種類は膨大であり、またその展開も重層的なものであるから、研究は困難であろう。ましてや一口に「仏頂尊とは……」と述べる事は難しく、系統あるいは時代的にレヴェルを区切りながら研究を積み重ねていくことが必要である。このような視点に立ち、当論文では唐代を中心に盛んに信仰された尊勝仏頂を取り上げ、その原初イメージを再構築していきたい。

尊勝仏頂に関する先行研究としては、以下のものがある[2]。

- 田中海応　「尊勝陀羅尼史観」(『大正大学学報』15所収、1933年)
- 干潟龍祥　「仏頂尊勝陀羅尼経諸伝の研究」(『密教研究』68所収、1939年)
- 那須政隆　「仏頂尊勝陀羅尼経の翻訳について」(『宮本正尊教授還暦記念論文集 印度学仏教学論集』所収、1952年)
- 長部和雄　『唐代密教史雑考』(神戸商科大学研究叢書Ⅷ26～36頁、1971年)
- 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文　『梵語仏典の研究(密教経典篇)』Ⅳ (100～105頁、1989年)
- 鎌田茂雄　「「清涼山記」攷—五台山における尊勝陀羅尼信仰—」(『興教大師八百五十年御遠忌記念論集 興教大師覚鑁研究』所収、1992年)

---

[1] 『陀羅尼集経』の構成等を考慮すると、大枠では光聚仏頂(帝殊羅施)系の経典に区分しうると思われるが、いまだ釈迦と光聚は未分離な関係であり(釈迦仏頂)、ここでは本文中からは割愛することとした。

[2] 荻原雲来先生による仏頂尊勝陀羅尼に関する論文(『密教』 2-1、あるいは『荻原雲来全集』所収)もあるようだが、今回は披見しえなかった。

漢訳の文献中には、全編の記事が中国において編集・製作されたもの、「中国撰述」と呼ばれるものが少なからず存在する。また由来の確かな文献であっても、中国において挿入あるいは編集された記事を有するものは数多い。このような事情から、今回の論文では基礎作業として、尊勝仏頂系の文献そのものを取り上げ、資料論として批判的に検討を加えたい。すなわち漢訳「尊勝陀羅尼経」各本の性格・翻訳年次・成立順序等を整理して、中国における受容の過程を明確にしたいのである。

同様の視点のものは、先に列挙した諸論文の中にも既に存在する。干潟龍祥先生は、論文の前半において、主に経序資料によって各本の関係および翻訳年次を整理している。那須政隆先生は、この干潟論文をうけ、資料範囲を諸目録にまで拡げて再検討、干潟説を補強している。また他論考でも少なからず資料論に言及し、仏頂尊勝陀羅尼経の中国受容の諸相は明確になりつつある。しかし細部では訂正あるいは再考されるべき余地も見受けられる。また文献の字面上からは到底克服できそうにない、幾つかの問題点も残されたままである。取り立てて目新しいものではないが、以下のような史伝資料を用いて、筆者なりに再検討をしていきたい。

❶ No.2149 道宣篇　『大唐内典録』(664 年編纂)
❷ No. 969 彦悰述　『仏頂最勝陀羅尼経序』
　(永淳元年、680 年製作。地婆訶羅訳の経序)
❸ No.2153 明佺篇　『大周刊定衆経目録』(695 年編纂)
❹ No. 967 志静述[3]　『仏頂尊勝陀羅尼経序』
　(695 年～730 年の製作。仏陀波利訳の経序)
❺ No.2152 智昇篇　『続古今訳経図紀』(730 年編纂)
❻ No.2154 智昇篇　『開元釈教録』(730 年編纂)
❼ No.2120 円照篇　『代宗朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』
❽ No.2157 円照篇　『貞元新定釈教目録』(800 年編纂)

[3] 干潟龍祥先生は、序文中に「定覚寺主僧志静云々」と第三者的な言い回しがあることから、志静述を疑っている。筆者はこれについて判断する材料を持たないが、とりあえず志静述として扱いたい。

❾ No.974C 武徹述　『加句霊験仏頂尊勝陀羅尼記』(長慶三年、823 年以降の製作か。金剛智・善無畏訳と目される二種の尊勝陀羅尼を載せる)
❿ No. 967 不　詳　『御製仏頂尊勝尊勝総持経呪序』
　(永楽九年六月、1411 年製作。仏陀波利訳本の経序)
＊以上、目録・経序などの種別を超えて、時代順に配列した。

これらの諸記録中には重複する記事も多いが、まず各々の資料の位置付けを概説したい。680 年前後に翻訳された仏陀波利訳本・杜行顗訳本・地婆訶羅訳本の相互の事情を検討する上で、特に重要なのは経序❷・❹と目録❸・❺・❻[4]の資料である。不空に関わる尊勝仏頂文献は❼・❽が詳しく、唐代の尊勝仏頂信仰の一側面を窺うには資料❼・❾が有用である。

二、　仏陀波利・杜行顗・地婆訶羅・義浄訳『仏頂尊勝陀羅尼経』について

中国に伝わった尊勝陀羅尼経のうち、最初期のものはいずれであろうか。❶『大唐内典録』第五には、保定四年の闍那耶舎訳・学士鮑永筆受として、『仏頂呪経并功能』の名前を挙げている(『大正蔵』第 55 巻 271 頁 c 段)。❸『大周刊定衆経目録』第四では、同文献について尊勝陀羅尼経と「同本別訳」と説明し、「右、武帝宝定(おそらく保定の間違い)四年に闍那耶舎等、長安旧城の四天王寺に於いて訳す。長房録に出ず(『大正蔵』第 55 巻 396 頁 c 段)」と記している。『仏頂呪経并功能』の名称からは、仏頂尊勝陀羅尼経とも、あるいはその原初形態とも想像されるが、現存はしておらず正体不明である。しかし武帝代保定四年とは 564 年のことであり、他の尊勝陀羅尼経が相次いで翻訳された 680 年前後とは余りにかけ離れている。564 年から 664 年(目録❶が編纂された年次)までに成立した諸目録に、この名を見ないことも疑念を懐かせる。目録❸の編者である明

[4] ❺『続古今訳経図紀』と❻『開元釈教録』は、いずれも智昇の編纂であって記事は大同である。しかし細かく検討をすると、❻『開元釈教録』にしかない重要な記事が確認される。

佺も「出長房録」と記し、現物を見ていなかった可能性が高い(目録❸が編纂された694年には、すでに消失した可能性もある)。諸事情を勘案していくと、その成立年代が下るか、あるいは尊勝陀羅尼とは異なる系統の呪句である可能性が高い。やはり仏陀波利・杜行顗・地婆訶羅訳の一群の尊勝陀羅尼経が、最初期のものと言ってよいと思われる。

① No.968　杜 行 顗訳　『仏頂尊勝陀羅尼経』(❷・❺・❻・❽儀鳳四年、679年翻訳)
② No.969　地婆訶羅訳　『仏頂最勝陀羅尼経』
(❸永隆元年、680年翻訳。❷・❻・❽永淳元年、682年)
③ No.967　仏陀波利訳　『仏頂尊勝陀羅尼経』(❸・❻・❽永淳二年、683年翻訳)
⑤　No.970　地婆訶羅訳　『最勝仏頂陀羅尼浄除業障呪経』
(❹に依れば687年間の再訳か。しかし❸に入録しないことから695～730年に成立した可能性もある)
⑤ No.971　義 浄 訳　『仏説仏頂尊勝陀羅尼経』(❻景龍四年、710年の翻訳)

仏陀波利・杜行顗・地婆訶羅訳本は680年に前後して翻訳されたものであるが、これらの翻訳にはいくつかの問題が秘められている。以下、これら一連の翻訳状況を最もよく説明している経序❹の記事を基調にして、論を進めたいと思う。

まず尊勝陀羅尼経の請来について整理しよう。経序❹によると、儀鳳元年(676年)に婆羅門僧仏陀波利が、文殊師利菩薩に面接しようとして五台山中にやって来たという。仏陀波利が一心に礼拝し終わるや一老人が現われ[5]、「尊勝陀羅尼

[5] 仏陀波利が、中国五台山中の一老人から、『尊勝陀羅尼経』の存在を教えられたことについて。後にも取り上げるが、❾武徹述『加句霊験仏頂尊勝陀羅尼記』でも、山裾に住んでいた王居士が五台山中で一老人に出会い、「尊勝陀羅尼」を授与されるという類話が記載される。この五台山流伝のエピソードは正史ではなく伝承の類と推測されるが、後世に与えた影響は大きい。頼富本宏先生の「五台山の文殊信仰」(『密教大系』第10巻所収)によれば、この経序❹の説話をうけて、五台山周辺で尊勝陀羅尼信仰が大流行したという。なぜ五台山の文殊信仰と、尊勝陀羅尼が結び付いたのかは不明であるが、何らかの理由があったのだろう。千葉照観先生の「金閣寺建立に見られる仏頂思想」(『天台学報』28所収)によれば、五台山の金閣寺は、『菩提場所説一字頂輪王経』に基づいて

経をインドから請来し、中国に普及させ人々を救うなら文殊師利菩薩の所在を教えよう」と告げた。これを聞いた仏陀波利は大いに喜び、再びインドに戻り、永淳二年(683年)に梵本を中国にもたらしたという。

干潟龍祥先生は請来時期について、この「永淳二年(683年)」にのっとり特に問題としていない。しかし経序❷ではこの梵本に基づいて、杜行顗が翻訳した年次を「儀鳳四年(679年)正月五日」としており矛盾している。この経序❹に類する記事が、目録❻・❽の仏陀波利の項に載せられるが、ここでは請来時期を記載しておらず、割注では永淳二年をもって、西明寺の梵語僧順貞との共訳時期と訂正している[6]。那須政隆先生もこの記事に注目して、経序❹の内容には誤りがあるとするが、この指摘は頷かれるものである。これらの諸記事を勘案していくと、仏陀波利による請来は儀鳳元年(676年)から四年(679年)の時期に限定することができる[7]。

次に杜行顗・地婆訶羅・仏陀波利訳の翻訳順序について。経序❹によると、年次は不明瞭であるが、仏陀波利が請来した梵本は宮廷内に納められ、鴻臚寺(❹では司賓寺)典客の杜行顗、および日照三蔵等によって翻訳され宮中内に留め置かれたという。この記事によると、杜行顗・地婆訶羅の共訳ということになるが、実際には杜行顗訳一本・地婆訶羅訳二本と別立されている。

一方の経序❷では、儀鳳四年正月五日に、杜行顗が寧遠将軍であった度婆等とともに翻訳したとして、仏陀波利・地婆訶羅については触れない。この問題は、すでに干潟龍祥先生も指摘するところである。

筆者の見解としては、一見合致を見ないこれらの記事も、同じ一つの動向を表現しているように思われる。目録❻の杜行顗の項には、「寧遠将軍度婆、及び

建立されたという。併せて興味深い事実である。

[6] 「(割注)准経前序乃云。永淳二年迴至西京。具状聞奏。其年即共順貞再訳。名仏頂尊勝陀羅尼経。今尋此説年月稍乖其杜令訳者乃儀鳳四年正月五日也。日照再訳乃永淳元年五月十三日也。既云永淳　二年方達唐境。前之二本従何而得。又永淳二年天皇已幸東都。如何乃云在京訳出。其序復是永昌已後有人述記。卻敘前事致有参差。此波利訳者不可依序定其年月也」(『大正蔵』第55巻565頁b段、『開元釈教録』第九の仏陀波利の項)

[7] 那須政隆先生は、仏陀波利が儀鳳元年に初めて中国五台山に来たとの記事から、梵本の請来を儀鳳三・四年の頃と概算している。

中印度三蔵法師地婆訶羅、訳を証す(『大正蔵』第 55 巻 564 頁 b 段)」となっている。これらの記事を勘案すると両序の記録者の視点が異なるだけで、杜行顗を中心に、度婆・地婆訶羅等が証訳したのが実情かと推測される。そしてこの儀鳳四年(679 年)に行われた公の翻訳が、現存する①杜行顗訳本に配当されたと考えられる[8]。

ならば地婆訶羅訳本には②・④の二本が現存するが、これらはいつ、どこで翻訳されたのであろうか。まずは訳場について、目録❸には「東都東太原寺」とする。経序❷・目録❻でも、地婆訶羅の翻訳拠点を、東京の太原寺(大福先寺)、西京の太原寺(西崇福寺)および弘福寺と定めており、訳場の比定は容易である。

次に地婆訶羅本②の翻訳年次について。地婆訶羅訳本の経序である❷では、杜行顗の意志を受け継いだ彦琮が、地婆訶羅および沙門道成等の十人[9]を請い、再度、尊勝陀羅尼の幽趣を説明させたといい、文末には「于時永淳元年(682 年)五月二十三日也」の年次が付されている。目録❻・❽でも、この経序を受けて、翻訳の日時を「永淳元年(682 年)五月十三日也」としており、干潟龍祥先生は、この永淳元年(682 年)をもって、②の翻訳年次と定めている。しかし那須政隆先生が指摘するように、目録❸では「永隆元年(680 年)」という異なる年次を付しており再考の余地を残す。永隆元年に地婆訶羅が翻訳、それをうけ永淳元年に彦琮が経序❷を製したと考えることも可能であろう。また類似する年号である

[8] ①杜行顗訳本が儀鳳四年(679 年)に翻訳されたことについて若干の疑念もある。それは、すでに那須政隆先生が指摘するところであるが、695 年に編纂された目録❸に、①杜行顗訳本が入録されていないことである。このことについて那須先生は、単なる記載漏れである可能性、また宮廷内に留め置かれたために入録されなかった可能性等を指摘する。これらを判断することは難しいが、翻訳に参画した彦琮が、経序❷中で明言するのであるから、「儀鳳四年正月五日」の翻訳はほぼ間違いないことと思われる。

[9] 経序❷の「沙門道成等十人」について、目録❻では以下の訳僧の名を伝えている(『大正蔵』第 55 巻 564 頁 a 段)。

〔　訳　語　〕　戦陀・般若・提婆
〔　証梵語　〕　慧智
〔　証　義　〕　道成・薄塵・嘉尚・円測・霊弁・明恂・懐度など
〔綴文・筆受〕　思玄・復礼など
〔製序・標首〕　天后・親敷・睿藻

から誤写した可能性もある。いずれかの年次に断定することは難しいため、問題はここで留めておきたい。

続いて二つ目の地婆訶羅訳本④について検討したいが、この資料の取り扱いは難しい。まず干潟龍祥・長部和雄先生は、経序❹の記事に注目し、地婆訶羅による再訳年次を垂拱三年(687 年)としている。

「至垂拱三年。定覚寺主僧志静。因停在神都魏国東寺。親見日照三蔵。法師問其逗留一如上説。志静遂就三蔵法師諮受神呪。法師於是口宣梵音。経二七日句句委授。具足梵音一無差失。仍更取旧翻梵本勘校。所有脱錯悉皆改定。」

(『大正蔵』第 19 巻 349 頁 c 段)

この経序❹では、確かに志静が地婆訶羅から尊勝陀羅尼の教えを受けたこと、また旧翻訳の梵本を勘校して誤りを訂正したことが述べられる。しかしここで注意すべきは、「旧翻梵本」とするだけで、必ずしも地婆訶羅自身の旧本②と指定していないことである。この❹は③の経序であるという性格を考慮すると、あるいはこの「旧翻」が③仏陀波利本を指す可能性もあり、地婆訶羅再訳の記事と安易に断定することはできない。

687 年の地婆訶羅再訳について、他にも疑うべき要素がある。それは地婆訶羅没後の 695 年に編纂された目録❸中に、別訳④の名を見ないことである[10]。④と②が同本であること、また地婆訶羅が東都で沙門慧智と再訳したことを伝えるのは目録❺・❻であり、その説は 730 年にまで時代が下ってしまう[11]。このような事情から、④の成立について、地婆訶羅以降の後人が編集、「地婆訶羅」に仮託した可能性も考えられる(695～730 年)。

また、この問題と少なからず関連すると思われるが、④の本文中には他には

[10] 一方の地婆訶羅訳である②は、目録❸に入録されている。那須政隆先生も、目録❸に注目し同様の指摘をするが、「何らかの事情に依って記載漏れになったのかも知れない」とするのみで、地婆訶羅再訳という前提を疑ってはいない。

[11] 特に目録❻では、地婆訶羅訳④について、「(割註)第四出即与前経同本。日照後欲帰国於東都沙門慧智再訳前縁後法二文並広(『大正蔵』第 55 巻 564 頁 a 段)」と説明している。インドに帰国しようとするのに先立って再訳を試みたとするが、その必然性は不明である。

見られない特徴的な記事が見受けられる。干潟龍祥・那須政隆先生も若干指摘するところであるが、一例を示せば以下のような傾向である。

(a) 善住天子の前生譚：現世に生天できた善因と、悪趣の因となった過去の罪業を明かす
(b) 唯識思想の混入：陀羅尼が薫習して、阿頼耶識が仏種子になるという[12]
(c) 造壇法と絡めて六波羅蜜を説く[13]

これらの傾向は一口に、大乗的要素として括ることも可能だと思う。他異訳(①②③⑤)には全くない要素であり、純粋な翻訳というよりも、大乗的な文意が添加されたと見るのが妥当であろう[14]。この④の成立は、地婆訶羅の手によるものなのか否か、現時点で断言することは難しいが、正当な翻訳というよりも中国で編集・加工された経典である可能性は高いと思われる。

次に経序❹を基調にして、仏陀波利訳本③について検討をしたい。尊勝陀羅尼を世間に流行させ、人々を救済しようとの願いのもと、仏陀波利は梵本を中国に請来したという。しかし仏陀波利の意に反し、その梵本は杜行顗による翻訳後も、①本と共に宮廷内に長く留め置かれることになった。仏陀波利はこの事態に大いに悲嘆し、梵本の返却を宮廷に申し入れ、やっとのことで受理される運びとなった。仏陀波利は梵本を携え、永淳二年(683年)に西京の西明寺を訪れ、梵語に精通した中国僧順貞と共に翻訳をしたと記される[15]。仏陀波利の翻訳

13 「仏告天帝如是最勝仏頂陀羅尼呪。於末法時若有比丘比丘尼優婆塞優婆夷。及国王国母王子王母太子妃后百官宰相人非人等。乃至一切衆生但解語者。有能作是曼荼羅法。清浄塗地。若以土若以水若以香水。及瞿摩夷而厳飾之。散花燒香幢蓋幡灯。若以種種珍宝飲食供養之者。是即名為檀波羅蜜。営壇之時有悩不瞋。是即名為羼提波羅蜜。修壇勤勇不懈不怠。是即名為毘梨耶波羅蜜。専明法則一心不乱。是即名為禅波羅蜜。布置端正不喎不斜。善知分斉可與不可。是即名為般若波羅蜜。天帝依是言教建法事者。是即具足六波羅蜜。是故応当展転開示一切衆生。多所饒益獲菩提故」(『大正蔵』第19巻361頁b～c段)

14 干潟龍祥先生は、この④の原本について、地婆訶羅自身が請来したであろうとの見解を載せるが、記録はなく、推測の域を出たものではない。

15 また目録❺・❽によれば、皇帝の認可のもと、②地婆訶羅の翻訳に引き続き、大徳円

については、諸記録一致しており、そのまま承認して大過ないものと思われる。

最後に義浄訳⑤について、目録❻では、景龍四年(710年)に、大薦福寺翻経院において翻訳されたものとするが、これもそのまま承認してよいと思う。その内容は全体的に③仏陀波利訳と対応しており、那須政隆先生は③と⑤は同種の梵本と比定している。しかし⑤中には、全く独創的な記事も見受けられ、義浄自身が請来した別梵本の存在が想定される。

①～④に、「仏頂から放たれた光が一切世界をめぐり、再び仏口におさまった」とある記事が、⑤では増広されている。すなわち、仏が過去事を説く時には、光は背中から入り、未来事を説く時には胸より入り云々、といったように十二種に分けて説明しており興味深い[16]。

以上、①～⑤の一々について、その翻訳年次・背景等を検討してきたが、以上の記事をまとめると、二～三種の原本から五種類の漢訳が成立したことになる。最後に①・②・③が仏陀波利請来本の同本異訳であるという伝承について検討したいと思う。上記してきた通り、①・②・③は、等しく仏陀波利請来の梵本に基づいて翻訳されたと伝えられるが、現行の漢訳三本を比較してみると、色々と合致しない点が見えてくる。例えば序文の対告衆の箇所では、

①杜 行 顗本：大比丘衆八千人、菩薩三万二千(観自在・得大趣・弥勒・文殊師利童真・蓮華勝蔵・手金剛・持地・虚空蔵・除一切障・普賢菩薩が上首)、梵摩天一万(善吒梵摩が上首)、諸釈天衆一万二千、八部衆など
②地婆訶羅本：大比丘衆八千人、菩薩三万二千(文殊師利・蓮華勝蔵・離諸障・観世音・得大勢・執金剛・虚空蔵・普賢・弥勒・持地菩薩が上首)、梵摩天・善吒天一万、天衆帝一万二千、八部衆など
③仏陀波利本：大苾芻千二百五十人・諸大菩薩僧一万二千人

測も仏陀波利の翻訳を手伝ったことが述べられる。

16 「爾時世尊聞此語已。即便微笑於其頂上。放種種光遍照三千大千世界還至仏所。若仏世尊説過去事光従背入。若説未来事光従胸入。若説地獄事光従足下入。若説傍生事光従足跟入。若説餓鬼事光従足指入。若説人事光従膝入。若説力輪王事光従左手掌入。若説転輪王事光従右手掌入。若説天事光従臍入。若説声聞事光従口入。若説独覚事光従眉間入。若説阿耨多羅三藐三菩提事光従頂入。是時光明還至仏所。遶仏三匝従仏口入。」(『大正蔵』第19巻362頁a～b段)

というふうに①・②と③では同一本とは思えないほどの相違が示されている。そもそも三本を同本異訳とするのは目録❸であるが、編纂されたのは695年であり、実際の翻訳時からは若干の隔たりがあり、全幅の信頼は寄せがたい。全くの伝承として片付けるならば簡単であるが、「同本異訳」とするのには何らかの理由があったのだろう。

この序文の相違について干潟龍祥先生は、二つの可能性を述べている。一つ目は、「地婆訶羅自身も梵本を請来していた」という仮説をたて、その梵本によって仏陀波利本の序文を改定したために、③との相違が生じたというもの。二つ目は、仏陀波利(あるいは地婆訶羅)が二本の梵本を請来していたというもので、このうち干潟先生は前者の説を推している。

いずれの説も推測の域を出るものではないが、原本同異の問題をよく会通しているように思われる。ただ干潟先生は序文のみを問題にして、想定する原本を仏陀波利本請来本・地婆訶羅請来本の二種に限定するが、筆者の考えはこれと異なっている。三本の序文以降を対照していくと、少なからず異同が確認され、三本三様の内容を掲げる箇所も見受けられた。単に翻訳者の意匠に依拠するものもあろうが、そこには複数の原典の影がちらつく。仏陀波利が幾通りかの梵本(断片であっても)を請来した可能性、また地婆訶羅をはじめとするインド僧によって、すでに校勘すべき材が複数もたらされていた可能性は高い。仏陀波利請来の梵本を中心に、幾種かの対校原典を翻訳者の意匠にしたがって勘案・編訳して、①・②・③の各々が成立したのが実情ではないかと思われる。まだ検討の余地を残す箇所もあるが、以上の成果を踏まえて、『仏頂尊勝陀羅尼経』①～⑤に関するチャートを試みに提示したい。

儀鳳元年(676年)	・インド僧仏陀波利は中国五台山中で、一老人から『仏頂尊勝陀羅尼経』の存在を教えられる。 (＊このエピソードについては正史ではなく伝承の可能性が強い) ・『仏頂尊勝陀羅尼経』の存在を知った仏陀波利は、一度インドに戻り、梵本を入手して再び中国に至り、大帝に進呈した。

儀鳳四年(679年)	・正月五日、大帝は梵本を鴻臚寺(❹では司賓寺)典客であった杜行顗を中心に、寧遠将軍の度婆・地婆訶羅(日照三蔵)等に命じて翻訳させ、その経本を宮中に留めおいた。 **⇒①杜行顗訳『仏頂尊勝陀羅尼経』成立**
永隆元年(680年)	・地婆訶羅は、東京の太原寺・西京の弘福寺等において当経の翻訳を行なった。
永淳元年(682年)	・沙門道成等十人を請い、地婆訶羅(天竺三蔵)は幽趣を述べる。また併せて彦琮によって経序❷が作成された。 **⇒680年 or682年に②地婆訶羅訳『仏頂最勝陀羅尼経』成立** ・仏陀波利は世流布を願い、梵本の返却を宮廷に申し入れ受理される。
永淳二年(683年)	・仏陀波利は西明寺において、梵語に精通した中国僧順貞とともに翻訳を行なった。 **⇒③仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼経』成立**
垂拱三年(687年)	・定覚寺の僧志静は魏国東寺の地婆訶羅に直接会い、旧翻訳本を校勘して誤りを改定した。 **⇒④地婆訶羅訳『最勝仏頂陀羅尼浄除業障呪経』成立か？**
景龍四年(710年)	・義浄は大薦福寺翻経院において当経の翻訳を行なう **⇒⑤義浄訳『仏説仏頂尊勝陀羅尼経』成立**

三、金剛智・善無畏・不空訳の尊勝陀羅尼系儀軌について

『大正蔵』第19巻所収のNo.974B『仏頂尊勝陀羅尼経』には、以下のような奥書が付されている。

「師の云く、此の陀羅尼に凡そ九本有り。所謂、杜行顗・月照三蔵(*おそらく日照の間違い)・義浄三蔵・不空三蔵・仏陀波利・善無畏三蔵・金剛智三蔵等の訳する所の本なり」(『大正蔵』第19巻385頁c段)

この奥書は「建久二年辛」に製作されたものであり、1191年の時点で日本には九本の尊勝陀羅尼が伝わっていたことがわかる(九本としながらも、実際には七本の具名しか明かされない)。杜行顗・日照(地婆訶羅)・義浄・仏陀波利訳本についてはすでに検討をしたので、以下、善無畏・金剛智・不空訳なる尊勝陀羅尼を取り上げたい。

そこでまず、❾『加句霊験仏頂尊勝陀羅尼記』に注目したい。この❾は、朝議大夫兼侍御史であった武徹が、伝え聞いたところの尊勝陀羅尼の流伝、および諸霊験を集成したものである(＊当論文では、以下「武徹記」とよぶ)。巻末には「仏頂尊勝陀羅尼」・「仏頂尊勝陀羅尼加字具足本」という二種の陀羅尼が載せられ、後者には「此の陀羅尼本、中天竺三蔵善無畏、此の土に将伝す(『大正蔵』第19巻388頁b段)」との記事が付されている。武徹記を精読してみると、以下のように武徹の記述と、巻末の陀羅尼が対応してくることに気付く[17]。試みに提示したい。

○ 武徹記前半(大正蔵19巻386頁a段05～386頁c段28)：「仏頂尊勝陀羅尼」・・・・・・・金剛智訳本？
○ 武徹記後半(大正蔵19巻386頁c段29～387頁b段10)：「仏頂尊勝陀羅尼加字具足本」・・善無畏訳本

まず金剛智訳について知るために、武徹記前半を検証してみると、尊勝陀羅尼の流伝について三つのエピソードを読み取ることができた。

(1) 王開士が金剛智三蔵より授かったもの(721～741年の間か)
(2) 五台山人の王居士が山中の一老人から授かったもの(開元年間、713～741年)
(3) 王少府が夢中で一梵僧から授かったもの(おそらく開元年間、713～741年)

[17] 武徹記は、③仏陀波利訳本への対抗意識で一貫しており、筆者はこれらを一連の話と受け止めてしまったが、どうやら二種の話で構成されているようである。干潟龍祥先生も、「仏頂尊勝陀羅尼経諸伝の研究」65頁において、前半を武徹述、後を他者の撰述の可能性を指摘している。武徹の記の前半部分では、金剛智訳本とおぼしきものの霊験を高揚するのに対して、後半部分では「金剛智」について全く触れていない。明記はないものの、善無畏訳と目される「尊勝瑜伽両巻」の名称があること、また巻末に伝善無畏訳の「仏頂尊勝陀羅尼加字具足本」が載せられることから、後半部分を善無畏訳本に関する話として筆者は理解した。

金剛智訳本の存在を、(1)では明示、また(3)では「一梵僧」として暗示している。続く文章では、王開士と王居士と王少府が、東都でたまたま出会い、各々の所持する尊勝陀羅尼を比較すると、音・内容・字数ともに一致し、一本のごとくであったと伝えている。そして、「此れ即ち是れ金剛智三蔵の梵本訳出とは、仏陀波利所伝本と勘しむるに、文句大同なり(『大正蔵』第19巻386頁c段)」と記し、三つのエピソードを金剛智に帰せしめている。巻末の「仏頂尊勝陀羅尼」には、翻訳者の名前を見ないが、文章の構成を考えていくとこの陀羅尼が金剛智訳本に配当されるのであろう。しかし目録等に目を通してみても、金剛智三蔵が尊勝陀羅尼を翻訳したという記事はなく、三つのエピソードとともにその出所が疑わしい。当時、霊験があるとして巷で流行していた尊勝陀羅尼に、金剛智の名前が仮託されたのではなかろうか。

次に善無畏訳本について。まず❾武徹記の後半部分を検討してみると、二つの尊勝陀羅尼の流伝エピソードが読み取られる。

(4) 王繹長史が一老翁から授かったもの(739年)
(5) 都秋満が一神人の夢告を受けて、後に僧義衍から授かったもの(長慶三年、823年)

エピソード(5)の最後では、④仏陀波利本の文句に略脱が多いため、「新本」に依って修行すべきこと、また「尊勝瑜伽両巻」を伝えたことが述べられる。ここでの「新本」とは、巻末の「仏頂尊勝陀羅尼加字具足本」を、また「尊勝瑜伽両巻」とは、同じく善無畏訳と伝えられる『尊勝仏頂修瑜伽法儀軌』(上下二巻)を各々指すと考えられる。

この『尊勝仏頂修瑜伽法儀軌』は、『大正蔵経』第19巻(No.73)に収蔵されるもので、善無畏三蔵の手によると、さらに割註には弟子の喜無畏が撰文したものと伝える。同文献の素性を知る上で、注目すべきは下巻冒頭「大灌頂曼荼羅品第八」の記事であろう。

「(曼荼羅に関する規定を簡潔に述べた後)今は略して、金剛頂・大毘盧遮那経・并びに釈義十巻・蘇悉地・蘇摩呼・如意輪・七倶胝・瞿醯旦怛羅・不空羂索等の経に壇儀を撰集す」(『大正蔵』第19巻377頁c段)

「壇儀」をキーワードにして、諸経を比定していくと以下のようになると思う。

- 「金剛頂」・・・・・金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦経』(大正蔵 No.866)
- 「大毘盧遮那経」・・善無畏訳 『大毘盧遮那成仏神変加持経』(大正蔵 No.848)
- 「釈義十巻」・・・・善無畏説・一行記『大日経義釈』[18]
- 「蘇悉地」・・・・・輸波迦羅(善無畏)訳 『蘇悉地羯羅経』(大正蔵 No.893)
- 「蘇摩呼」・・・輸波迦羅(善無畏)訳 『蘇婆呼童子請問経』(大正蔵 No.895)
- 「如意輪」・・・菩提流志訳 『如意輪陀羅尼経』(大正蔵 No.1080)
- 「七倶胝」・・・善無畏訳 『七仏倶胝仏母心大准提陀羅尼法』(大正蔵 No.1078)
- 「瞿醯旦怛羅」・・・不空訳 『薩嚩耶経』(大正蔵 No.897)
- 「不空羂索」・・・・菩提流志訳 『不空羂索神変真言経』(大正蔵 No.1092)

三崎良周先生も指摘するところであるが、このうち「瞿醯旦怛羅」と目されるものは不空訳を除いてはなく、この『尊勝仏頂修瑜伽法儀軌』は不空が翻訳をはじめた天宝五年(746 年)にまで、その成立は下るであろう[19]。尊勝陀羅尼経を基調としながらも、その内容は、五仏頂法・胎蔵法・金剛界法を取り混ぜた合糅軌であり、おそらく 746 年から❾武徹記の 823 年までに成立して、「善無畏」の名に仮託されたものと推測される[20]。これを裏付けるように、❻『開元録』・❽『貞元録』には記載は無く、839 年『霊巌寺和尚請来法門道具等目録』・847 年『恵運禅師将来教法目録』といった和製目録に見受けられるのみである。他にも「善無畏訳」と伝えられ、傾向を同じくするものとして「三種悉地破地獄儀軌」と称される一群の経軌が存在する。

- 善無畏訳『三種悉地破地獄転業障出三界秘密陀羅尼法』(大正蔵 No.905)

[18] 那須政隆先生は『大日経疏』(大正蔵 No.1796)に比定しているが、「釈義」より筆者は『大日経義釈』とした。『密教辞典』によると、両本ともに十巻本が存在するという。

[19] 干潟龍祥先生は、「仏頂尊勝陀羅尼経諸伝の研究」において、『薩嚩耶経』は本当に不空訳であるのか、また善無畏は『薩嚩耶経』の原本を披見していたのではないか、という可能性を指摘している。非常に興味深い視点であるが、やはり内容等、総合的に考えていくと善無畏より時代が下る成立であろう。

[20] 那須政隆先生は、善無畏門下の誰かの撰集として、豊山大学蔵本の「喜無畏集」の書き込みを肯定している。一方、三崎良周先生は、「喜無畏」の存在そのものに疑念をはさみ、その内容から当本の成立を不空の天宝五年(746 年)以後としている。

- 善無畏訳『仏頂尊勝心破地獄転業障出三界秘密三身仏果三種悉地真言儀軌』(大正蔵 No.906)
- 善無畏訳『仏頂尊勝心破地獄転業障出三界秘密陀羅尼』(大正蔵 No.907)

「仏頂尊勝」を経題に掲げながらも、主は毘盧遮那を中心とした金胎合行軌であり、さらに「五臓観」等の道教的な要素の混入も見られる。松永有見・那須政隆・松長有慶・三崎良周先生等[21]による先行研究があるが、定説では唐代末期に中国で製作、「善無畏」に仮託されたものとされている。

中国の諸目録中に、善無畏が尊勝仏頂系の経軌を翻訳・編纂したという記録は見当たらない。しかし複数の尊勝仏頂経軌に「善無畏」の名前が付されたことを考えると、何らかの結託すべき要素があるのだろう。問題提起として留めおきたい。

最後に不空訳とされる尊勝仏頂系経軌について検討したい。『大正蔵経』中には、不空訳として、以下の二種を挙げている。

(1) 不空訳『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』一巻(大正蔵 No.972)
(2) 不空訳『仏頂尊勝陀羅尼注義』(大正蔵 No.974D)

❼『表制集』巻三の不空自撰録(「三朝所翻経請入目録流行表一首」)に、すでに(1)の儀軌がおさめられることから、天宝五年(746)～大暦六年(771 年)に成立したものであろう。❽『貞元録』第二十二でも、

「仏頂尊勝念誦法一巻(経内題云仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌)大興善寺三蔵沙門不空奉詔訳貞元新入目録」(『大正蔵』第 55 巻 930 頁 c 段)

として、不空の手によることを裏付けている。その内容は、尊勝陀羅尼像を本

[21] 三種悉地破地獄儀軌についての代表的な研究としては、以下のような名前が挙げられる。松永有見「三種悉地破地獄儀軌の研究」(『密教研究』35 所収、1929 年)・那須政隆「三種悉地破地獄儀軌の研究」(『宮本正尊記念論文集』所収、1954 年)・松長有慶「三種悉地」と破地獄」(『密教文化』121 所収、1977 年)・三崎良周『台密の研究』(1988 年)他多数。

尊に、尊勝陀羅尼の受持方法を明かすものであるが、その具体的な行法は胎蔵系の組立てのようである[22]。「奉詔訳」とするも、純粋な翻訳ではなくて、不空自らが尊勝仏頂および胎蔵法あるいは蘇悉地を勘案して製作した実践次第と推測される。それでは何故、そのような尊勝仏頂系の儀軌法を製作する必要があったのだろうか。この問を考える上で、手がかりになりそうな記事が『表制集』に数首見受けられる。『表制集』第二巻所収、大暦五年(770 年)十月一日付けの「請太原号令堂安像浄土院抽僧 制書一首」では、

> 「太原府大唐興国太崇福寺中高祖神尭皇帝起義処。号令堂請安置普賢菩薩像一鋪。浄土院灌頂道場処。請簡擇二七僧奉為国長誦仏頂尊勝陀羅尼」
>
> (『大正蔵』第 52 巻 837 頁 c 段)

として、浄土院灌頂道場処に十四人の僧を請い、仏頂尊勝陀羅尼を読誦させるべきことが、不空によって要請されている。また『表制集』第五巻所収、大暦十一年(776 年)二月八日付けの「勅天下僧尼誦尊勝真言 制一首」には、

> 「奉 勅語李元琮。天下僧尼令誦仏頂尊勝陀羅尼。限一月日誦令精熟。仍仰毎日誦二十一遍。毎年至正月一日。遣賀正使。具所誦遍数進来」
>
> (『大正蔵』第 52 巻 852 頁 c 段)

として、天下の僧尼は毎日二十一遍、尊勝陀羅尼を読誦して、前年に誦えた陀羅尼数を正月に申告すべき旨を伝えている。また鎌田茂雄先生は、『八厄室金石補正目録』によって、長安二年(702 年)から会昌四年(844 年)にいたるまで数多くの尊勝陀羅尼経幢が建立されたことを指摘している。これらの記事を読むと、いかに尊勝陀羅尼が国家に広く浸透し、影響力を与えていたかがわかる。このような状況下、尊勝陀羅尼を受持する方法が問題とされ、その需要に呼応する形で、不空が儀軌法を撰述したと考えられる。また千葉照観先生の一連の論文において、指摘される通り、不空の中で仏頂系の密教が重要な位置を占めていたことも、(1)撰述の原動力になったのだろう[23]。

(2)『仏頂尊勝陀羅尼注義』については、中国の諸録には未入載であり、また脱誤が多いことから、干潟龍祥先生は、法崇撰『仏頂尊勝陀羅尼経教跡義中陀羅尼』に依って成立、不空に仮託されたものと見ている[24]。首肯されるべき見解であろう。日本へは円仁が初請来であり、承和六年(839 年)編の録[25]に見られることから、不空からそれ程遠くない時代には成立していたのだろう。尊勝陀羅尼の読誦が国策に取り入れられたのだから、その陀羅尼の講義も少なからずあったと推測される。不空述とは言い過ぎかもしれないが、その不空周辺において成立した可能性は少なからずあると思われる。

四、結　語

以上、主だった仏頂尊勝陀羅尼系の文献を取り上げ、特に中国における受容、すなわちインド原典から漢訳への動向を中心に検討を進めた。まず論文の前半では、仏陀波利・杜行顗・地婆訶羅・義浄訳本の成立順序と、各本の関係性を明らかにした。この辺の事情については、すでに干潟龍祥・那須政隆両先生による精度の高い御論考があり、その成果は容易に超えられるものではない。しかし以後に提出された論文を参照し、また漢訳諸資料を再検討した結果、若干の修正と新たな問題点を提示することができた。

---

22 当儀軌法について、那須政隆先生は大体金剛界の作法に依るとするが、筆者が見る限り、登場する諸尊も印言も胎蔵系のものが主体と思われる。

23 不空における仏頂尊観を探った千葉先生の御論考として、以下のものが挙げられる。「金閣寺建立に見られる仏頂思想」(『天台学報』28)・「不空訳経中の仏頂尊曼荼羅について」(『天台学報』29)・「不空の密教における仏頂尊の位置付け」(『大正大学綜合仏教研究所年報』9)他。

24 干潟龍祥「仏頂尊勝陀羅尼経諸伝の研究」64～65 頁

25 円仁編纂『日本国承和五年入唐求法目録』(839 年)
「仏頂尊勝陀羅尼注義一巻(大興善寺沙門不空訳)」(『大正蔵』第 55 巻 1074 頁 b 段)
円仁編纂『慈覚大師在唐送進録』(840 年)
「梵漢両字仏頂尊勝陀羅尼注義一巻(不空三蔵訳)」(『大正蔵』第 55 巻 1076 頁 c 段)
円仁編纂『入唐新求聖教目録』(846 年)
「仏頂尊勝陀羅尼注義一巻(不空)」(『大正蔵』第 55 巻 1079 頁 b 段)

論文の後半では一転して、金剛智・善無畏・不空訳とされる尊勝仏頂系文献について検討をした。特に不空の項では、『表制集』等の史伝資料を用い、当時の社会背景との関連付けも多少試みることができた。尊勝陀羅尼は中国・日本のみならず、シルクロードの周辺地域で幅広く展開・受容されたものである。社会との接点、また民衆の信仰といった問題は、もっと多角的に論じられるべきものと思われる。今後の課題にしたい。

今回の論考は、伝承・成立といった問題にしぼり、内容には余り立ち入らなかった。外周を探ったに過ぎないとの反省もあるが、批判的に諸文献を扱ったことにより、尊勝仏頂の成立・展開を探る上での必要な尺度を手に入れた気がする。以後、資料内容の精査に勉め、尊勝仏頂の成立、延いては仏頂系の密教の解明に向けて研究を積み上げていきたい。

恵果和尚の研究

朴埈奭＜大正大学博士課程＞

1. 序論
2. 恵果関係資料について
　1) 諸文献に現われる錯誤
　2) 諸文献の製作年代考察
3. 恵果の誕生と死
　1) 出自　/　2) 人柄　/　3) 入寂
4. 恵果の思想
　1) 師事　/　2) 受法　/　3) 授法　/　4) 著作
5. 恵果の密教付法上の位置
　1) 密教付法全体における位置
　2) 日本密教における位置 ― 空海との関わり
6. 結論

1. 序論

恵果和尚(746～805)は密教僧として、中国唐代の人物である。日本における真言宗の開創者である空海は804年入唐して恵果に師事し、師の入寂まで、たった六ヶ月の間に密教相承の印可を受けることとなる。印度から中国へ、またそれが日本まで広がることができたのはこういった阿闍梨間の秘密相承があったからこそあり得たといえる。恵果の門下には中国僧のみならず、新羅からの恵日、ジャワ(訶陵國)からの辨弘などがあり、活躍していた。唐代の長安は密教興